

研究所だより

第140号

令和8年3月23日発行
 可児市教育委員会
 可児市教育研究所
 可児市広見1丁目5番地
 TEL(0574)63-4841

E-mail :kyoikukenkkyu@city.kani.lg.jp

教員という仕事はやりがいのある職業

可児市小中学校長会長（東可児中学校 校長） 堀田 誠

○人との出会いとは不思議なもの

当時は、拠点校指導教員でなく、教務主任が初任者指導の担当でした。3回目の採用試験に合格できたので、大学を出たばかりの1年目は桜ヶ丘小で常勤講師として勤務しました。その時に教務主任をしてみえたのは、秋山光起先生でした。同じ小学校に3名もの新規採用教員がいました。常勤講師だった自分は、初任者研修の対象ではありませんでしたが、秋山先生は採用された3名と同じように初任者研修を行ってくださいました。一番記憶に残っているのは、初めてきちんとした指導案をつくった研究授業でした。小学4年生の社会科で、「寒い地域と温かい地域」という題材でした。授業の内容は、「沖縄県の2月の写真を見せると桜が咲いている。子どもはその写真は4月だと思っているので、2月だと知ると驚き、『なぜ!』という疑問のもと学習課題が出来上がる。そして、気温と降水量のグラフをみることで、沖縄は冬でも温かい気候であることに気付いていく」という授業です。秋山先生は社会科の教師で、初めて社会科の本質について、手取り足取り教えてくださいました。勿論、本時に至るまで、秋山先生のご指導は妥協のないものでした。授業後、「いい授業だった」と褒めていただいたことを今でも覚えています。それよりも、講師だった自分に、新規採用者と同じように初任者指導をいただいたことに、秋山先生の偉大さ・懐の深さに感謝の気持ちで一杯でした。その後、秋山先生は、初任校の東可児中では、教頭として赴任され、一緒でした。また、4校目の蘇南中では、校長としておみえになりました。人との出会いとは不思議なもので、本当に尊敬できる先生の一人です。

○何十年ぶりに所感を読む

4月に所感を教育委員会へ提出されたかと思っています。実際に教員として勤務することになり、フレッシュな気持ちで所感を書かれたことと思

います。可児市は、紙ベースで提出された所感を冊子等に加工して、教育研究所の書庫に保管しています。当時は、原稿用紙2～3枚の分量でした。前述したように、可児市だけでも40人以上の初任者がいたため、冊子の大きさもかなりあります。読み返すと、「意外と立派なことが書いてある」と思いました。それと同時に、今、こんな文章が書けるだろうかとも思いました。どことなく眩しくうつったからです。「初心忘れるべからず」という諺があります。何年か後に読み返すのもよいです。

○これからの先生方に願うこと

教員という職業はやりがいのある職業だと思います。小学校だと1年目から担任を任せられます。保護者にしてみれば、学校が始まると「誰が校長なのか」よりも「誰が自分の子の担任なのか」が一番の関心ごとです。自分の子どもの一年がかかっているのです。直接子どもとかかわる担任に関心が行くのは、当然だと思います。中学校は、副担任として1年目を迎えることが多いです。高校進学が間近に迫り、授業にかかる比重が高いから、まずは教科の力をつけることに力点が置かれているのかもしれませんが、両者とも共通しているのは、子どもやその保護者から、大きな期待をかけられていることです。そんな重責を、1か月前まで学生だった人に任せるとするのは、一般企業ではありえないことかもしれません。では、その期待に応えるためにはどうしたらよいのだろうか。自分が思うことは、「(どんなことがあろうとも)子どもの前に立ち続けること」「子どもにとって、この1時間の授業は、一生に一度であること」を大切にすることだと考えます。2～3年教員を経験すると、驕りが出てきます。謙虚な気持ちで、6年目までは教員としてのスタイルを築いてください。そして、7年目以降は、一度作ったスタイルを壊すことができる勇気をもってください。

「つながる」ということ

不登校児童生徒の居場所 「可児市教育支援センター」

ある秋の日。Aさんは学校を休むようになった。学校へ来てても教室に入ることができず、相談室で過ごすようになった。「教室での生活に疲れた」「人間関係のトラブル」「担任と合わない」等、私は担任としてAさんが教室に入ることができない理由を考えたが、直接聞くことはできなかった。また、Aさんも何も話さなかった。

私は、毎朝相談室にいるAさんにその日の学習予定を渡し続けた。授業で使用したプリントや教材を渡した。行事や学年での活動の際に、誘いの声をかけ続けた。学校を休んだ時は、家庭訪問をした。私は、Aさんと「つながる」ことを大切にしたい。私は、つながっていると思っていたが……。可児市教育支援センターに勤め始め、大切なことに気付いた。



1 ありのままでいいんだよ

可児市教育支援センターには、学校へ行きたくても行けない子、学校へは行かないと決めた子、学校生活に疲れた子、学習内容が分からなくて困っている子、仲間関係でトラブルがあった子、家庭環境が不安定な子、発達障がいを抱えている子等、様々な不登校児童生徒がやってきます。

本センターのコンセプト1は、児童生徒の「ありのまま」を受け入れることです。本人の状況や不登校の理由は様々です。それを掴んで、「こうするといいよ。」「こうすべきだよ。」等のアドバイスをするのではなく、「そうなんだね。」と共感し、「今のままでいいんだよ。」と本人のありのままを受け入れます。それを積み重ねることにより、安心感が生まれ、心が穏やかになってきます。そして、少しずつ心が開放され、自分の想いを話せるようになります。不登校対応のスタートラインです。

2 楽しさいっぱい

冬休み明け、「早くスマイリングルームが始まらないかな。」と待っている子がたくさんいます。本センターのコンセプト2は、「楽しもう！そして、自分の好き(興味・関心)を見つけよう。」です。学校へ行っていない子は、各種行事や体

験活動に参加していません。そのため、経験が不足しているとともに、「楽しさ」を味わう機会も少ないです。本センターでは、週に1つは行事や体験活動を行っています。見学系、アウトドア系、スポーツ系、芸術系、キャリア系、食育系等、多種多様な行事や活動があります。参加は自由です。自分で考え、自分で決めて参加します。子どもたちは、「楽しさ」を体感しながら、エネルギーを蓄えていきます。そして、笑顔が生まれ、元気になっていきます。社会的自立への第一歩です。児童生徒は、自分の生き方を見つめ、一步一步前へ進んでいきます。(後退することもあるかもしれませんが…)

3 そっと「寄り添う」

朝、子どもたちがやってきます。「今日の調子はどうかな？」と声をかけます。帰りには、「今日は〇〇ができるようになったね。」等と認め励ましの声をかけます。

本センターのコンセプト3は、「そっと『寄り添う』」ことです。センター職員は10名で、1日の通室生は約20名ほどです。子どもたちとの距離は近く、目も行き届きます。微妙な変化も見落とすことなく、子どもたちに声をかけます。また保護者との距離も近く、送迎の際に子どもたちの頑張りとともに、心配なことも伝えることができます。センター職員が伴走者となり、児童生徒や保護者にそっと寄り添いながら歩んでいます。

☺ 最後に……

「つながる」ということは、先ず相手の「ありのまま」を受け入れ、認めること。そして、「楽しさ」を創出しながら笑顔を生み、居場所をつくり、伴走者とともに歩いていくこと。簡単そうで難しい。私は、Aさんと「つながっているつもり」であって、本当はつながっていないのかもしれない。今後は、「つながる」ということを問い返しながら子どもたちと歩いていきたい。

(教育支援センター 中田峰司)



令和7年度 授業改善サポートチーム 実践報告

1 名称の変更

今年度、本会の役割と活動内容を見直しました。昨年度までは、設定した課題（テーマ）に対して学校所員自身が授業実践を行い、その成果を校内に広める活動が主でした。しかし今年度からは、課題解決に向けた「取り組み方」そのものの改善を図り、それを校内に波及させていくという、より「コーディネーター」としての役割に重点を置くこととしました。この役割の変化を踏まえ、本年度第1回の会議にて議論を重ねた結果、会の名称を従来の「学校所員会」から「授業改善サポートチーム」へと変更いたしました。この新しい名称には、以下の3つの想いが込められています。

- ・授業改善は、どの時代においても教員が求めるものであり、求めていかねばならないものである。
- ・校内の先生方をサポートしていく立場でありたい。
- ・我々が一つの「チーム」となり、課題の共有や意見交流を深めていく。

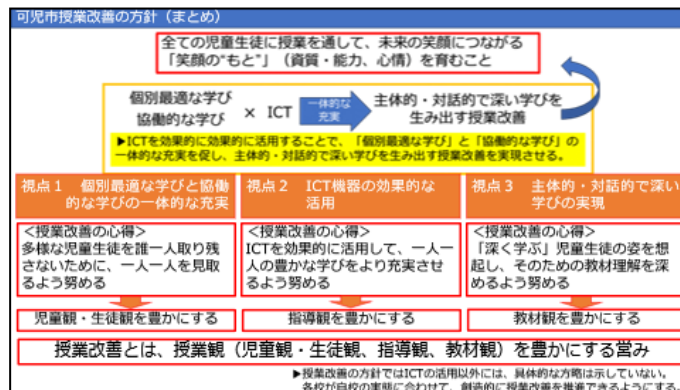
2 活動報告

- 5月14日 学校所員会
*会の意義の確認し、それを踏まえ会の名称について協議しました。
- 5月29日 授業改善サポートチーム 第2回ミーティング
演題「ICTを活用した授業改善」
講師 青山先生（愛知教育大学）
*今まで「当たり前」に指導していたことについて見つめ直す機会となりました。
- 10月1日 授業改善サポートチーム 臨時ミーティング
*可児市の授業改善の方針について確認しました。
- 11月7日 授業改善サポートチーム 第3回ミーティング
*笑顔の学校公表会に向けて、自校の授業改善の提案内容について交流しました。
- 2月19日 授業改善サポートチーム
*今年度の活動を報告し、それをもとに、次年度の活動について交流しました。

3 可児市の授業改善の方針

笑顔の学校公表会で、授業改善の方針を示し

ました。1枚のスライドにまとめたものが以下です。



4 今年度の活動を終えて

- 【所員の先生方の振り返りより】
- ・他校の授業改善の取組を聞くことが、自分にとって大変刺激になった。
 - ・他校との交流は参考になりました。特に、どのようにコーディネートしていくかを交流できたことがよかった。
 - ・青山先生の講演では学び方だけでなく考え（授業観）についても多くの学びがあった。
 - ・「可児市の授業改善の方針」を校内にも確実に周知したことで、授業改善のための教材研究会が自然と職員間で行われた。「自己調整学習」や「ICTの活用」が推進された。生徒が自ら学び方を工夫して学ぶ場面が増えた。
 - ・自校の研究を助けるものとして、可児市の方針を取り入れて、生徒の意欲、協働学習の質向上が見られた。
 - ・可児市の方針から具体となるキーワードを設定した。そのキーワードの伝わりやすさから、実践を積み重ねてくださり、実践を報告することができた。学校の研究ともつなげて高めたい。

市の方針では、授業改善を、授業観（児童・生徒観、指導観、教材観）を豊かにする営みとしております。次年度においても、各校の実態を踏まえ、校内研究推進等と連携しながら先生方一人一人の授業改善（授業観を豊かにする営み）をサポートしていけるよう取り組んでいきます。そして、「笑顔の“もと”」を育む授業を追究してまいります。

令和7年度 「笑顔の学校」公表会 南帷子小学校



1. 「笑顔の“もと”」について

本校は、**笑顔のもと**を「かしこさ・やさしさ・たくましさ」とし、子どもたちが安心して、笑顔で生活できること、将来にわたって、「自立」し、他者と「共生」できる力をつけることをめざしています。

2. 「笑顔の“もと”」の具体

「やさしさ」教師が、すべての教育活動の中で、児童が仲間に「思いやり」の気持ちを持ち、良好な仲間関係を培う力を養う指導と価値づけを進めています。児童会の代表委員会が、「南帷っ子4つのめあて」を、「4つの自慢」にしようとする取組を進めていますが、その4つの内容を達成するには、仲間への「思いやり」の心のもとになることを、自分たちの言葉ややり方で主体的に呼びかけており、それに応えて動く子が確実に増えています。

「たくましさ」のもとになっているのは、本校の特色である、「わんぱく山」活動です。昔のように、毎日山に入ることはできませんが、森林関係の補助金や人材を活用し、環境学習やふるさと学習をしたり、遊具の製作活動や高学年による低学年への活動の招待をしたりするなどの

活動を進めています。

「かしこさ」学習面では、「学びの共同体」の趣旨を生かした、実践研究を進めています。その理由は、仲間との協働的な学びに、どの子どもも安心して参加できることを目指しているからです。全職員が公開授業を行い、研究を積み重ねることで、一人一人の学ぶ意欲と質を高めています。今までの実践で、一方的な「教えあい」ではなく、対等な関係での「学びあい」が見られるようになってきました。この基盤として、児童の仲間関係の向上も影響しています。また、終末のジャンプの問題を工夫することで、児童が意欲的に取り組む姿が見られます。

3. 「笑顔の“もと”」のこれから

公表会の機会をいただいたことで、本校の「笑顔の“もと”」を全職員で再認識することができました。児童も含めて全校一体で自慢や誇りを共に作ることを通して、児童がより一層主体的に活動し、成果と成長を実感できるようにしていきます。また、CSを中心としたPTAや地域の方々とも協力し、笑顔の学校第2フェイズを作っていきたいと考えています。

令和7年度 「笑顔の学校」公表会 桜ヶ丘小学校

令和7年度 可児市笑顔の学校公表会に向けて



1 笑顔の学校公表会のコンセプト（桜ヶ丘小学校笑顔の“もと”）

子どもも大人も わくわく やってみたい！

【コンセプトに込めた願い】

- ・よりよい学校生活になるように、子どもが「やってみたい！」と思ったことができるから笑顔になれる！
- ・生活上の問題（学級生活・学校生活）・学習問題に会ったときに、子どもが生活経験や既習内容を想起して「このように“やってみたい！””と思えるから“わくわく”して笑顔になれる！
- ・仲間と一緒に追究していくことが楽しくて“笑顔”になれる！
- ・児童にとって“わくわく”して楽しい教育活動となるように、あらかじめ教師集団が楽しい雰囲気の中で手立てを考えるから、子どもも教師も笑顔になれる！
- ・地域の大人が“こんなことをやってみたい”と進んで教育活動に関わって下さるから、楽しい学校生活になり、笑顔になれる！また、児童の頑張りを認めたり、寄り添ったりしてくれるから笑顔になれる！

2 笑顔の学校公表会で公開する教育活動

<p>【特別支援全研・算数科全研】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見学や既習内容から児童の「やってみたい」という思いを喚起する。それに基づいて児童の主体性を大切にしながら、仲間の考えを取り入れたり、はげまし合ったりして協働的に学ぶことができるように学習活動を実施することで、力を付ける。 	<p>【地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校生活をよりよくしたいと願う地域の方と連携した教育活動を行ったり、学校への支援をいただいたりすることで多くの大人が関わり、子どもの笑顔につなげている。また、教師以外の大人からもあたたかく接してもらうことで自己肯定感を育む。 	<p>【児童会活動（委員会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校を「もっとよくしたい」「もっと楽しくしたい」という願いを基に、児童の発意発想を大切にしたい児童会活動を計画していく。教師は地域との連携も視野に入れて事前にどのような活動を仕組むか想定し、伴走者としての役割を計画しておく。
--	--	--

1. はじめに

桜ヶ丘小学校は、児童の「やってみたい」を大切にしている。児童の自主的、実践的な活動を通して、自己肯定感や自己有用感を育てている。

学習活動や児童会活動だけではなく、地域の方とも連携することで、児童が「やってよかった」「学校って楽しい」と思うことができる学校づくりを全職員で行ってきた。

2. 実践

(1) 全校研究会 生活単元学習：「にこにこカフェを開こう」

単元の導入で校区内にある喫茶店を見学した。

児童は、おいしい食事と温かいおもてなしでお客さんを笑顔にする店員に憧れをもち、自分もそのようなカフェを開きたいという願いから単元の学習を開始した。

準備を進めたり、実際にお客さんを招いて活動をしたりする中で、「もっと楽しいお店にするにはどうしたらよいだろうか」と考えて、活動を工夫改善してきた。全校研究会当日には、仲間と進んで関わったり、自分の役割を果たしたりする姿があった。児童の願いから学習が始まり、児童の発意発想によって活動が改善されることで、単元のねらいを達成して、付けたい力を養うことができた。まさに、自己肯定感・自己有用感を育む実践であった。

(2) 児童会活動

「全校を笑顔でいっぱいになりたい」という願いを実現するために、執行委員が中心となって取組を開始した。温かく接し合うことで自分も幸せになる「ハッピーターン」を合言葉に活動した。

尾木氏を迎えた集会では、温かく接することの大切さを劇で表現したり、各学級代表の児童がはじめをなくし、誰もが笑顔で過ごすために大切なことを質問したりした。事後にはそれを実践し、笑顔あふれる雰囲気を高めた。

(3) 地域との連携

桜ヶ丘小学校では、地域の方も一体となって児童の「やってみたい」を支えている。

PTA フォーラムでは、それまでの発表から形式を変更して演劇スタイルで発表を行った。児童と地域の方と教員とが一体となった発表となった。参加した児童は大きな充実感を味わうことができた。

3. まとめ

笑顔の学校公表会は、私たちの実践を振り返り、実践の値打ちを確認する機会となった。地域と連携して、児童の発意発想を生かした教育活動を行っていくことが、主体的・対話的で深い学びを実現させ、将来を切り拓くための生きて働く力を付けていくことになると感じた。

今後も児童に力を付ける実践に邁進していく。

第41回 教育実践研究助成事業 教育実践論文 各賞候補論文の概要

優秀賞候補論文
として出品

自律的に学び続け、数学の楽しさを実感できる生徒の育成

～ 探究型の数学の授業設計を通して ～

可児市立蘇南中学校 教諭 兼松 明

数学の本質に根差した学びの楽しさを実感できる生徒を育成することは、私の願いである。一方、本校は外国にルーツをもつ生徒が約20%在籍するなどの近未来型の学校であり、生徒の学習進度や理解度は多様である。そこで、多様な特性を有する生徒を包摂できるよう、探究型の数学の授業設計を試みた。具体的には、学問的側面と実践的側面の双方において、生徒が自ら問いを立て、その問いについて数学的な見方・考え方を働かせながら探究する学びを実現する授業を目指した。その結果、学問的側面では、学びの様相に応じたブース設定や深い理解の保障を図った探究型個別進度学習を仕組むことで、生徒が自ら知識を体系的に構築することができた。実践的側面では、単元導入と出口で現実事象に内在した問題を仕組み、魅力ある教材の開発や視点を踏まえた振り返り活動を設定することで、生徒が自ら問題場면을数理的に捉え、課題解決することができた。そして、双方の学びの手立てが、有機的に働いたことで、本研究の主題に迫る成果を得ることができた。

【講評】

本実践は、多様な背景をもつ生徒が集う学級で、一斉指導から脱却し「学びを委ねる」ことで自律的な学習者の育成を目指しており、包摂的な授業について示唆に富む。単元導入で学校行事に関連した課題を提示し単元末に再考させる設計は、学習の有用性を実感させ、「数学が役に立つ」との評価向上に繋がった。また、個別進度学習にルーブリック評価を組み込み、指導と評価の一体化を図った点も秀逸である。客観的データが示す生徒の意識変容には本実践の有効性が示されている。

優秀賞候補論文として出品

古典に親しみ、自己を見つめる生徒の育成

～ 兼好法師のものの見方・考え方を手掛かりに、自己の生き方につなぐ国語科指導 ～

可児市立蘇南中学校 教諭 加藤 祐輝

本研究は、古典に親しみを感じにくい生徒の実態を踏まえ、兼好法師のものの見方・考え方を手掛かりとして、古典を自分事として捉え、自己の生き方を主体的に考える生徒の育成を目指した実践である。事前の意識調査および定期テストの分析から、生徒は古典を現代の生活と関連付けて捉えることができず、語句理解や文脈把握、筆者のものの見方・考え方を読み取る力に課題があることが明らかとなった。そこで、「徒然草」を教材とし、現代語訳や語注を手掛かりに作品を読み、兼好法師のものの見方・考え方を自分自身の考えと比較しながら理解を深める言語活動を設定した。単元のまとめでは、「生き方のヒントカード」を作成させ、文章との対話や仲間との対話を通して、言葉を根拠に自分の考えを形成・再構築する学習を展開した。その結果、生徒は主体的・対話的に学びを深め、古典への親しみを強めるとともに、学習で得た考えを日常生活に生かそうとする姿が見られた。以上より、本実践は研究仮説の妥当性を検証することができた。

【講評】

生徒の古典への苦手意識を分析し、兼好法師の視点を介して自己の生き方を問い直す、卓越した実践である。データに基づく課題の明確化から「生き方のヒントカード」の作成という出口を設定したことで、学びの必然性を生んだ。「文章との対話」から「仲間との対話」へと至る二段構えの交流を通じた思考の再構築は、学習への肯定的な意識を100%へと引き上げる劇的な成果を生んだ。生徒が自らの生き方を見つめ直した姿は、まさに古典が「自分ごと」となった瞬間であり、その教育的価値は非常に高い。

優秀賞候補論文として出品

主体的に社会の形成に参画する態度の育成

～「名鉄広見線の存廃問題」を核とした自由進度学習と意思決定のプロセスを通して～

可児市立東可児中学校 教諭 石井 雅大

本研究は、社会参画への意欲はあるが、自ら課題を解決するための学習方法やその経験で得た自信に乏しい生徒に対し、「主体的に社会の形成に参画する態度」を育成することを目的とした。

具体的には、生徒の生活圏にある「名鉄広見線（新可児－御嵩区間）の存廃問題」を題材化し、解決困難なジレンマを含む課題を追究していく過程に、自由進度学習を取り入れた。生徒自身が学習計画を立て、必要な情報を収集・選択する過程を通して、自律的な学習力を養った。また、思考ツールのマトリクスやYチャートを用いて多面的・多角的な視点から考察し、意思決定を図る中で、単なる手段の選択から価値の判断へと深化させた。

事後アンケートでは、大多数の生徒が自由進度学習のよさを実感すると共に、政治参画への力強い決意をもつに至った。本実践は、教師主導から生徒が納得解の追究のために自ら学ぶ学習へと転換させ、主体的に社会の形成に参画する態度を育む有効な手立てであることを検証できた。

【講評】

地域の課題である名鉄広見線の存廃問題を核とした単元構成が秀でた実践である。自由進度学習を導入し、自律的に学ぶ場を保障したことは、生徒が既習事項を生かし多面的・多角的に思考を深化させる姿につながった。存続や廃止等の多様な意見から選択・判断し、論理的に説明する過程が、当事者意識や政治参画への意欲向上につながった。本実践で得られた知見は、主権者教育の在り方として今後の社会科教育が目指すべき一つの指針を示すものである。

新人賞候補論文として出品

自己表現能力の育成

～ 英作文における個別最適な学びや協働的な学びの指導を通して ～

可児市立蘇南中学校 教諭 住 果花

本研究は、個別最適な学びや協働的な学びを通して、自己表現能力を育む、外国語指導の在り方について考察したものである。外国語の学習では、実際の言語活動を通して、自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成が求められている。しかし、英語で「書くこと」に対して苦手意識を持つ生徒は多く、表現活動に主体的に取り組めない姿が見られた。そこで、本研究では、生徒が自分のレベルに合った「ヒントカード」を使用し、自ら必要な表現を選択できるように工夫した個別最適な学びの場と、作成した原稿をもとに考えや表現を共有し合い、自分の原稿を見直していく協働的な学びの場を設けた。その結果、研究前の1回と研究中の2回の書く活動を通して、明らかに書く量が増え、自分の思いや考えを含めて様々な視点で書くことができるようになった。どの学力の生徒にとっても、意欲や達成感につながった。このことから、ヒントカードを活用した個別最適な学びと仲間との協働的な学びが、自己表現能力を育むのに有効であることが分かった。

【講評】

本研究は、生徒に求められる力を的確に捉え、「書くこと」に焦点を当てた意義深い実践である。レベルに応じたヒントカードの使用による個別最適な学びと、ICTの活用による協働的な学びとを両立させたことで、生徒の自信を高め、互いに支え合う学びを促進させることにつながった。生徒の「できた。」「書けた。」という声の裏には、丁寧な準備と粘り強い指導があったことが分かる。生徒に英語科学習の達成感や楽しさを味わわせたいという強い思いが伝わる、価値ある研究である。

優秀賞候補論文として出品

南帷子小における学校経営構想の精度向上と指導観の統一を図る取組 ～「児童へのアセスメント」と「職員等との対話」を通して～

可児市立南帷子小学校 校長 奥村 尚浩

校長の指導観や理念を基に策定される学校経営構想の精度を向上させるため、学校の課題に関わる児童・職員へのアセスメントを行った。本校児童は落ち着いているが、仲間関係にやや不安があったり、諸活動の値打ちが十分感じられていなかったりするため、深い仲間関係を築き、主体性を高め、達成感・成就感を味わわせることが有効である等の知見を得た。また、本校職員は、個に寄り添う丁寧な指導が十分できているが、今後、児童主体の活動を生み出す指導を充実させることが有効であることが分かった。一方、児童の実態や今後目指す児童の姿、目指す学校像を全教職員で討議することにより、職員間で学校の現状について共通理解したり、目指すべき指導観の統一を図ったりすることができた。これらの取組を通して、学校経営構想を、児童・職員の実態がより反映され、必然性のあるものに改善することができた。また、構想を具現するための具体的な方途を明確に定めることに繋がった。

【講評】

本論文は、校長の経営理念を心理学的アセスメントと対話で補完し、客観的根拠に基づいた学校経営を実現した優れた報告である。児童の学校適応感や職員の指導効力感を数値で可視化し、学校課題を的確に把握した点が秀でている。このデータを基に対話を重ね、組織の指導観を統一して策定された「南帷子小3つの大切」は、経営構想の精度と実効性を飛躍的に高めている。データと対話の両輪で学校の経営構想を確かなものにした本実践は、現代の学校経営における一つの模範となると言える。

【令和7年度 可児市教育実践論文をふり返って】



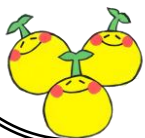
本年度の可児市教育実践論文には、計29名の応募がありました。

採用2年目、3年目といった若手の層の先生に加え、長年の経験を有する中堅層やベテラン層の先生からも、教育研究に対する高い意識が感じられる論文をご応募いただきました。「児童生徒の成長を願う」という強い思いが感じられ、確かな「教材観」「指導観」「児童生徒観」に基づいたすぐれた実践とそれを論理的にまとめた論文が多数見受けられました。

審査においては、本年度から採用6年目以内の先生方の論文を対象にした新人賞、主に管理職の論文を対象にした特別賞を新たに創設しました。審査の結果、優秀賞5点、新人賞1点、特別賞1点、優良賞6点、奨励賞16点が選出されました。

来年度も、児童生徒たちに、未来の笑顔につながる笑顔の“もと”を育むため、また、ご自身の教育実践力の向上のために、より多くの先生の論文の執筆をお待ちしています。来年度は、教育研究所の夏季研修として、教育実践論文講座を新たに開講する予定です。多くの先生方に受講していただきたいと思っています。

最後に、大変ご多忙の中、執筆された応募者の方々、論文のご指導にあられた方々、審査に携わってくださった方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。



えがが
笑顔の“もと”

教育委員会 教育研究所 教育実践論文担当 青木裕介

＜奨励賞＞ ※学番順				
No.	学校名	氏名	領域	研究テーマ
1	今渡南小	村澤 真紀子	道徳	たった一度のかけがえない人生を主体的によりよく生きる児童を育てるために ～道徳的課題を自分ごととしてとらえ、主体的に生きる児童の変容を通して～
2	今渡南小	鈴木 涼翔	算数	自ら考え、伝え合い、学びを深めていく子の育成ために ～数学的活動を通して、数学的な見方・考え方を働かせる子を目指して～
3	帷子小	直井 駿	国語	「読む」力を伸ばすための単元構想と手立ての工夫 ～ 時代に合わせた国語学習 ～
4	帷子小	加藤 真子	理科	自ら科学的に問題解決するための指導援助と教具の工夫 ～第5学年 理科「流れる水のはたらき」の実践を通して～
5	春里小	高橋 朱音	算数	算数科におけるできた・わかったと言える児童の育成 ～ICT端末の効果的な活用を通して～
6	東明小	石田 倭新	社会	「知る・調べる」を通して地域の伝統を、自分ごととして捉え、自分の考えを仲間に伝えることができる児童の育成 ～ PDCAサイクルとICTの利活用 ～
7	今渡北小	大田 里奈	生活	自己の思いや考えを発信できる児童の育成を目指して ～ 単元の出口の明確化と学習過程の可視化を通して ～
8	今渡北小	川上 祐平	社会	事実を把握する力とそこから考察する力を育成する指導の在り方 ～ 児童の思考の過程を可視化するICTの活用を通して ～
9	中部中	齋木 慧悟	数学	数学的な見方・考え方を育む表現活動の充実 ～問題解決過程における説明力の育成を目指して～
10	中部中	安部 厚輝	数学	自ら学ぶ姿へ ～単元カードを活用した自己課題設定と解法の根拠を明らかにする学習を通して～
11	西可児中	土屋 織恵	保健体育	主体的な学びを促すICT活用の在り方 ～保健体育科における運動学習の質的向上を目指して～
12	西可児中	南谷 裕二	保健体育	持続可能な体力向上の取り組み ～できるようになった喜びを実感できるスキルアップ～
13	西可児中	岩田 綾香	英語	Can Communicate する生徒の育成を目指して ～ 本質的な楽しさを実感するための手立て ～
14	西可児中	西尾 知隼	特別支援教育	障がいによる困難さを主体的に改善・克服しようとする生徒の育成 ～ 本質的な楽しさを実感できる自立活動の指導の在り方 ～
15	西可児中	安江 愛	英語	パフォーマンステストを学習に生かす授業指導の工夫 ～ 意見の再構築と通じた英語表現力の育成 ～
16	広陵中	藤本 紀和	総合的な学習の時間	総合的な学習の時間における地域人材の伴走効果 —未開発の教育資源を活かす実践—

